

唐話使用の南京官話音

中村雅之

1. 岡島冠山の唐話資料

岡島冠山(1674-1728)は『唐話纂要』など中国語会話テキストを数種刊行したが、最初の『唐話纂要』では片仮名で杭州音を記し、それ以後のテキストでは南京官話音を記した。ここでは早稲田大学所蔵の『唐話使用』によって、その南京官話音の特徴を簡単に述べたい。

2. 杭州音と南京音

『唐話纂要』の杭州音と『唐話使用』の南京官話音との最大の違いは濁音声母の有無である。『唐話纂要』には「談：ダン」「頭：デ・ウ」「道：ダ・ウ」など濁音声母があり、『唐話使用』では「談：タン」「頭：テ・ウ」「道：タ・ウ」のように濁音声母はない。声門閉鎖を伴う入声韻をもつのは双方に共通である。

濁音声母の有無を除けば、『唐話纂要』と『唐話使用』の表記はよく似ていると言っ
てよいが、入声韻の音形に若干の相違も見られる¹。

	『唐話纂要』	『唐話使用』
「覚」	「キヤ」	「キヨツ」
「約」	「ヤ」	「ヨツ」
「薬」	「ヤ」	「ヨツ」
「略」	「リヤ」	「リヨツ」

いわゆる宕江撰入声韻の音形であるが、おおむね『唐話纂要』ではア段で、『唐話使用』ではオ段で記される。この例も含めて、『唐話使用』の表記は明清時代に西欧人が記した官話音に非常に近い。

3. 官話資料に散見する方言音

西欧宣教師によるローマ字資料も日本人による仮名表記の資料も、官話の音形はどの地域においても非常に均一的であるが、同時に若干の方言的な要素が散発的に見られることも知られている。

1580年代に広東肇慶で書かれたと思われる『賓主問答私擬』では、tap(塔)、iap(鴨)などの広東語的な表記が散見し²、17世紀の日本で中国僧によってまとめられ

¹ 入声の表示法は、『唐話纂要』では無標(非入声で母音を重ねる)、『唐話使用』では「ツ」を付す。

² リッチ(Matteo Ricci)とルッジェーリ(Michele Ruggieri)による会話テキスト。cf. 古屋昭弘1989.

た『黄檗清規』に付された仮名発音においても、福建語の特徴が一部に表れる³。しかしながら、これらは全体としてはやはり南京音を核に据えた音形になっており、官話の均質性を脅かすものではない。また、トリゴー (Nicolas Trigault) の編になる『西儒耳目資』(1626) は明末の官話音を体系化したものであるが、そこでは南京音を中心にしつつも、山西ないし陝西の官話音の特徴をも含み、ある程度の揺れを内包している。

『唐話使用』の南京官話音にも、他の官話音にはあまり見られない音形が見える。それは蟹摂四等 (齒音) が「細：スエイ」「西：スエイ」のようになることで、期待される「スイイ」や「スイ、」ではない。[sie] ないし [siei] のような音を意図しているように見える。この音形は『唐話纂要』の「細：スエ、」「西：スエ、」とほぼ同じであり、長崎に住む唐人の官話音に杭州音の訛りがあった例と見なすことができる。

なお、北京語で「er 音」になる「児」「二」「而」などは『唐話纂要』『唐話使用』ともに「ルウ」であり、ピンインの「ri」のような音を表すと思われる。これは杭州訛りであると同時に南京官話音にとっても正音であり、エドキンズ (Joseph Edkins) の『官話文法』(1857) における「ri」や初期のラテン化新文字における「re」と比較すべきものであろう。

<参考文献>

有坂秀世1938「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』15-10.

古屋昭弘 1989「明代官話の一資料---リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」---」『東洋學報』70-3・4.

³ 有坂秀世1938 は、「かやうに我が國に黄檗宗を傳へた高僧達は何れも福建省出身の人であるから、その宗徒が諷經に用ゐる唐音も定めし福建音であらう、とは誰しも一往想像する所であり、又實際黄檗清規の中には如 (イ°) 遺 (ミ) 次 (チュ) 勤 (キユン) 幽 (ヒーウ) の如き明白な福州音も見出されるのであるが、それはただ部分的のことである。全體としてみれば、黄檗唐音は、標準語たる官話 (殊に南京官話) の音であり、その間にまま福州訛を混じてゐるに過ぎない。」と記す。